

正しい信仰の功德

『重須殿女房御返事』（弘安四年・一二八一）

（本文）

月は山よりいでて山をてらす。わざわいは口より出でて身をやぶる。さいわいは心よりいでて我をかざる。今正月の始めに法華経をくやうしまいらせんとをぼしめす御心は、木より花のさき、池より蓮のつぼみ、雪山のせんだんのひらけ、月の始めて出づるなるべし。

今日日本の法華経をかたきとしてわざわいを千里の外よりまねきよせぬ。これをもつてをもうに、今また法華経を信ずる人はさいわいを万里の外よりあつむべし。影は体より生ずるもの、法華経をかたきとする人の国は、体にかげのそうがごとくわざわい來たるべし。法華経を信ずる人はせんだんにかをばしさのそなえたるがごとし。またまた申し候ふべし

（現代語訳）

たとえば、月は山から出てその山を照らす。悪口は口から出てその身を破滅させる。翻れば、善い行ないというものは心から出てその人を幸せにするのである。そのように、何ごともその原因を作ったところに結果が返ってくるものだが、いま、正月の始めに法華経をご供養申し上げようとなさるお心は、つまらない木に美しい桜の花が咲き、汚ない池に蓮華がつぼみをつけ、雪山の梅檀が雪を割って育ち、月が始めて山から出るように、自身をかざるによい果報をもたらすであろう。

今、日本国の人々は、法華経を敵としたために患（わづら）いを千里の外から招き寄せてしまっている。このことから推し測ると、今、法華経を信じている人は、幸せを万里の外から集めることである。影は体によってできるものだが、法華経を敵とする人の国は、体に影が付き添っているように、患いがいつもつきまとうことであろう。その反対に、法華経を信ずる人は、ただでさえ香りのよい梅檀にいつそうの香ばしさを添えたように、すばらしい功德を得られることとまちがいないのである。